

# 英語論文執筆 ---還暦後の手習い---

函館市医師会  
秋山記念病院

まきもと  
楨本  
ふかし  
深

今の中堅から若手の先生方は、英語論文執筆も手慣れているものだと思います。私らの年代では、学位論文は和文手書きの時代でした。

特に英語の得意な教授後継候補の秀才先生が、タイプライターをカタカタ叩いて書き上げ、英文ジャーナルに投稿するのを見て、かっこいいなと思ったりしていたのを覚えています。そんな世界とは縁がないと思って過ごしてきました。

還暦を過ぎたころ、某学会の指導医を取るため、3編の学会誌掲載が条件となっていたため投稿したことがあります。ずっと昔に投稿した2編はハードルも低く苦にならなかった記憶がありました。ところが時代が変わり、査読も厳しくなっていました。

考案で書かれた事項を軸に、それを言うためにはこういったデータの追加が必要といった感じで、査読改定を繰り返すたびに、どんどんとボリュームが増えていった。大人気ないことに統計処理方法を巡って反論したことで不採用になってしまいました。

失意の中、インパクトファクター2.8の海外一流ジャーナルの編集委員である先生と知り合い、悔しいので何とか英文で書いて投稿してみたいと申し出てみました。快諾していただき、論文の書き方の指導を受けながら書いていきました。函館産婦人科医会で5回講演をしていただいた後山尚久先生です。

英語はあまり得意な方ではなかったもので、とても苦労しました。幸い、コンピュータの翻訳アプリがあり、自動翻訳してくれます。ただ、とんでもない不自然な訳文になることが多い。しかし、とにかくたたき台を出してくれて、書き出しのストレスから解放されるのが何よりです。

複雑な長文はまず正確な翻訳は無理。短い簡潔な日本語にして、自動翻訳にかけると比較的まじな訳文が出てくる。それをひっくり返して、英文から日本語への自動翻訳をかけて、正しい日本語訳文になっていればOK。

試行錯誤しているうちに、日本語は主語を省いた文章が許容されるが、英語は主語が絶対に必要。そのため訳文は、私は--私は--、の繰り返しになりとても見苦しい。主語を省いた日本語文章は受身形に直してから翻訳にかける。という方法を思いついた。これで、私が、私は、などが繰り返されることなく文章の格調がすこし良くなった。

日本語では単数、複数の表現があいまいで、この点でも自動翻訳で誤りが出やすい要因となる。

Wordで校正モードにすると、主語、述語の単数、複数の不一致を指摘してくれる。

前置詞は、カットアンドトライで、いろいろと入れてみて日本語訳文が正しいかどうかで検証できる。

ここまでで、とにかく通じる文章は書ける。ただ自然な表現で違和感のないものかどうか？の課題は残る。その一つとして、未解決の問題は冠詞。こればかりは自動翻訳でも、自分のつたない文法知識でもどうにもならない。a、the、つけない。その3つのどれなのか？これらは最終的にはNativeの校正に頼るしかない。

そんなこんなで何とか書き上げ、英文ジャーナルの査読を受けた。Resultを軸に、はっきりしたことだけ述べなさい。推測や示唆は一切無用。Discussionの文章が半分以下に減った。日本のジャーナルではボリュームが増えていったのに対して、査読改定を繰り返すたびにどんどんと短くなっていったのが印象的でした。

晴れて一流ジャーナルに掲載され、ささやかながらインパクトファクターを所有する身となれました。

以後国際学会の演題招聘、査読の依頼、ハゲタカジャーナルの執筆依頼などなど、メールがどんどん来るようになりました。Prof. Makimotoなどと書かれてくすぐったい思いです。真面目なものは丁重にお断りの返事を、ハゲタカらしいものは無視。これも微小ながらインパクトファクターを持ったことによる変化でした。

某学会誌の編集長だった人は、現在学会長になっており、今年8月26日にWebで国際学会をはじめて主催することになりました。産婦人科関連のシンポジウムコーディネータを仰せつかりました。以前査読の往復で、随分とやんちゃをして嫌われても仕方ない状態でしたが、会長の度量の大きさに感服し感謝です。現在自分の演題と、セッションをまとめあげるため奔走中です。英文論文は3編ほど経験した後なので、あまりストレスなく進んでいます。

ああ、今30歳だったら、一流の医学者をめざして羽ばたいていけるきっかけになったのだろう。いやタイプライターしかなかったあの頃と、今の知的インフラとを比べるのは不公平。今の知的インフラの恩恵を受けてここまでやれた。そして、今の若いドクターはこのくらいのことは当たり前のようにこなしている。自分の現実は73歳。

まあしかし、若いドクターの当たり前に少し近づけたということでよしとしよう。そして還暦を過ぎたからの手習いとして、老化予防とおもしろおかしく過ごせる一助になっているので、おおいによしと勝手に考えております。